

学校名	埼玉県立常盤高等学校
-----	------------

平成 28 年度スーパー・プロフェッショナル・ハイスクール 事業計画書

I 委託事業の内容

1. 研究開発課題名

5 年一貫教育の特徴を生かした、看護専門職者を育成するための先進的なプログラムの研究開発

～「豊かな人間性」「確かな知識・技術」「科学的思考・判断力」と「生涯学び続ける力」を育てるために～

2. 研究の目的

本校では、時代が求める看護専門職者にとっての必要な力を、『人間性』『実践能力』『研究能力』とそれらの力を十分に活用し具体的な行動につなげる力（コンピテンシー）と考えている。

そこで本研究では「豊かな人間性」「確かな知識・技術」「科学的思考・判断力」と「生涯学び続ける力」の育成をテーマとして取組み、生涯にわたって看護の専門性を追求し続ける力を持った看護専門職者を育てることを目的とする。

3. 実施期間

契約日から平成 29 年 3 月 15 日まで

※ 最長で当該年度の 3 月 15 日（3 月 15 日が行政機関の休日に当たる場合は直前の開庁日）まで

4. 当該年度における実施計画

今回の研究では、広い視野に立った看護観を育てることを目指した「豊かな人間性」、臨床に即した看護実践能力を育てることを目指した「確かな知識・技術」、看護の探求、研究的態度を養うことを目指した「科学的な思考・判断力」の育成を 3 つの柱とし、さらにこの 3 つを総括した「生涯学び続ける力」を育て、社会の第一線で活躍できる専門的職業人を育成することを目的としている。そのために、これまでの教育活動を見直し、これらの力が身につくようなプログラム開発を行うことを目標とする。この研究を成功させるため、全教員が連携し、社会の要請に応えられる専門職の育成を目指し、評価・修正しながら研究を進めていく。

昨年度の取組では、主観的評価が多くなっているが、今年度は「身に付いた力」や生徒の変容について、生徒の成果物や感想をもとにして定性的に客観的な評価を行っていく。

1) 豊かな人間性

地域で行われている様々な活動等を通して地域で行われている活動を知り、奉仕の心を育て、命の大切さについて考える豊かな人間性を養うとともに、自律した思考に基づいた倫理的な判断力を持ち、広い視野に立った看護観の確立を目指している。自己理解や他者理解を深め相手を尊重し思いやりのある心を持ち、自他の生命を尊重する態度を養い、看護のみならず広い視野に立ち人間を理解することのできる人間性を身につけることをねらいとする。「夏休み地域活動体験」を通して、「社会への参画力」「事態への対応力」「礼節」「共有する力」を身につけ、看護のみならず広い視野に立ち人間を理解する基礎を養う。「倫理に関する授業」では、「時代の事象を見る力」「情報の取捨選択力」「自己決定力」「状況判断力」を身につけ、自律した思考に基づいた倫理的な判断力を持ち、時代や場面に応じた対応ができる力を身につけることを目指す。

(1) 活動のねらい (学年別)

	夏休み地域活動体験 (復興支援ボランティアスタディツアー)	ライフステージからみた生命倫理に関する授業 (人間関係論における演習の充実)
高校 1年	地域で行われている活動を知る。年代の異なる人とかかわりの中で相手を思いやる心や奉仕の心を育てる。自分の経験を他者に伝えることができる。	花壇づくりを通して、協力、責任感、連携など人との関係やチームの一員としての立場を考えた行動をとることができる。看護専門職者として常に自覚と責任をもって行動する態度の基礎を養う。
高校 2年	地域での活動体験を通して、他者を尊重する事の大切さや、自分の果たせる役割について考えることができる。看護での学びを活かした活動について考えることができる。	日々の学校生活や各教科における授業を通して、看護専門職者として常に自覚と責任をもって行動する態度の基礎を養う(SPHでの取組はなし)。
高校 3年	看護での学びを生かした地域活動体験を行う。周囲の状況を判断し、その場に合わせた行動をとることができる。	日々の学校生活や各教科における授業を通して、看護専門職者として常に自覚と責任をもって行動する態度の基礎を養う(SPHでの取組はなし)。
専攻 科 1年	看護での学びを生かした地域活動体験を行い、経験を通して、自分なりの看護観を持つ。	人生各期において生命倫理における課題や問題点があることを理解する。
専攻 科 2年		臨地実習において、これまでに身につけた、倫理観や看護観に基づいた看護を实践する。
		信頼関係を構築するためのコミュニケーションに関する基礎的な知識と技術を習得させる。
		精神面を充実し、看護の職業に従事する者として、人間関係を円滑に保つためのコミュニケーションを实践する。

(2) 活動の概要

a. 夏休み地域活動体験 (高校1年生～専攻科1年生)

高校1年生から専攻科1年生の全員が、夏休みに1人1日以上地域活動体験を行う。これらの活動のねらいは、地域で行われている活動を知ること、「相手の話を聞き、それをふまえて自分の意見を伝える」というコミュニケーション力を養うこと、異年齢との交流を通して、礼節を学ぶことや、相手の立場に立って考える豊かな人間性を養うことである。生徒のこれまでの活動の経験をもとに、継続性のあるボランティア活動体験ができることを期待し、事前に前年度の活動の振り返りを行い情報を共有する。

復興支援ボランティアスタディツアー (高校3年生、専攻科1年生の希望者)

震災直後より被災地を訪問している聖学院大学・高校と連携し、夏休みに4日間、宮城県仙台市、

岩手県釜石市を訪問し、ボランティアスタディツアーを実施する。「常盤ならではのボランティア活動を提案するプロジェクト」の活動のテーマである「自分で感じる」→「考えを深める」→「みんなに広げる」の3年目の活動として「みんなに広げる」を目指して取組む予定である。校内での活動だけでなく、聖学院大学の大学生によるプロジェクトリーダー会議に企画の段階から参加し、釜石の方々のニーズを把握し、それに合わせて常盤高校生が自分たちにできることを考えて実施していく。訪問の後には、活動から学んだことや、今後の活動へ向けた報告書を作成し、校内のみならず地域での報告や他の活動団体との交流を行う。

b. ライフステージからみた生命倫理に関する授業（専攻科2年生）

各ライフステージに生じる生命倫理に関連した問題を知り、自分のこととして考え、意見を持つことは、看護観を養う上で有用である。現在、本校の教育課程では、これらの問題について看護の視点から系統的に学ぶ機会を設けていない。そこで今回の取組では、専攻科で行われている看護科目の各領域の中で生命倫理を扱う単元を関連付け、生まれてから亡くなるまでの各ライフステージにおける倫理上の問題を考え倫理的ジレンマを感じられる授業への転換を行っている。各領域の授業の配置を生命倫理に関連した単元を取り出しコラボ授業として配置するように工夫し、また授業方法の統一によって一斉講義の授業形態から、視聴覚教材などの活用により生徒が主体的に考えることを促す指導方法への転換を図る。生徒は倫理的ジレンマを感じ、広い視野から物事を考える力を養い、自分の意見を持ち看護観を養うことを目指す。この活動を通して、社会のできごとに関心を持って見ようとする「時代の事象を見る力」、目的に合った情報を選びとる「情報の取捨選択力」、自分で物事を決める「自己決定力」、相手やその場の様子をつかみ、どうしたらよいかを決める「状況判断力」を身につけ、これらの力を総合した「看護観」を養うことを目指す。

今年度は、昨年度の成果をもとにして、授業時間の配置の工夫や、生徒への導入の仕方、教員間で授業の内容を事前に共有し、授業の進め方の統一などを行っていく。生命倫理に関する単元の配置や授業の時期を整理し、学習に系統性をもたらすシラバスの在り方を継続して検討する。

また、看護師としての看護観育成の基礎を作る事を目的として、看護と共通するテーマに関する他職種の専門家による講義を連携協定を結んでいる聖学院大学に依頼し実施する。

※人間関係論の講義における演習の充実（専攻科1年生）

看護観育成の一環として、対人関係を苦手とする生徒が増えている傾向にあることから、特別非常勤講師と連携し、当該講師の担当授業「人間関係論」の中で人間を理解し対人関係を円滑にし、コミュニケーション力の向上をねらいとする演習を実施する。コミュニケーションや、対人関係力は、授業の演習のみでその効果を評価できるものではないが、この演習において学んだスキルを臨地実習の場面において活用できたかどうか、また、臨地実習において困った場面の振り返りなど、対人関係におけるコミュニケーション力を継続して自己評価できる指標を作成する。

※花を育てる活動（高校1年生）

「豊かな人間性」を育てる取組として、SPHの象徴である花壇で花を育てる活動を高校1年生が行う。隣接するさいたま桜高等学園生産技術科の生徒の協力を得ながら花を種から育て、水やりや草取りを行い、花壇の整備を行う。チームの一員としての責任感、協調性、連帯感、あるいは花を美しいと感じる感性など、生徒の心・感性に何らかの変容がもたらされることを期待し実施する。

(3) 評価の視点

a. ボランティア活動

(ア) 定量評価

育てたい力	評価の観点	目標値
社会への参画力	自ら体験する活動を選び、申し込むことができる。 地域における活動のニーズを把握できる。	1年間で身についた力を「とてもついた」「ある程度ついた」と肯定的な回答をした生徒の割合が80%となることを目標値とする。また釜石ボランティアスタディツアーに参加した生徒は100%を目標値とする。
事態への対応力	周囲の状況を判断しその場に合わせた行動を取ることができる。	
礼 節	様々な年代の人と交流し、相手の心や状況をふまえた行動や作法ができる。 他人のために尽くす奉仕の心を持つことができる。	
共有する力	一人一人が持っている知識や経験を出し合い、分かち合うことができる。	

(イ) 定性評価

定量評価を補足するための評価として、夏休み活動体験報告書や感想などから「身に付いた力」について生徒の変容に関する記載内容の変化を分析して評価する。

b. 「ライフステージからみた生命倫理に関する授業」について

(ア) 定量評価

育てたい力	評価の観点	目標値
時代の事象を見る力	社会のできごとに関心をもって見ようとする力	1年間で身についた力を「とてもついた」「ある程度ついた」と肯定的な回答をした生徒の割合が80%となることを目標値とする。
情報の取捨選択力	目的に合った情報を選びとれる力	
自己決定力	自分の考えで物事を決める事ができる力	
状況判断力	相手やその場の様子をつかみ、どうしたらよいか決められる力	

(イ) 定性評価

定量評価を補足するための評価として、感想などから生徒の変容に関する記載内容の変化を分析して評価する。各授業における授業前と授業後の考え方が明記される形でのワークシートを作成する。

※「人間関係論の講義における演習の充実」について

対人関係におけるコミュニケーション力は、校内での演習のみで効果が測れるものではないが、演習で学んだことが臨地実習を始め他の場面で、活用されているかについて継続して生徒の自己評価を確認していく。今年度は継続して自己評価できる指標を作成する。

2) 確かな知識技術

「デジタルコンテンツを用いたeラーニングによる授業の開発」

本校では、以前より協調学習やプロジェクト学習に注目しこれらを実践していたが、今回、更なるアクティブラーニングの指導法を研究すべく、看護教科において、ICTを活用し、eラーニングを導入した授業を実施している。それにより、生徒の看護知識・技術への一層の興味関心を高め、理解の深化に努めるとともに、情報を収集、分析し、判断する「情報活用能力」を育成し、生徒のICT活用能力向上を図ることをねらいとする。自学自習の習慣を身につけさせたい。

「専門家による特別授業」

生徒の確かな知識・技術の定着とその応用能力・実践的能力の育成のために、病院（臨床指導者・認定看護師）・企業と連携し教育内容の充実を図ることをねらいとしている。それにより、より専門的な「知識力」と「臨床でのイメージ力」を身につけさせたい。これまで、専攻科から実施していた、医師や看護師などの専門職者による授業を、高校生から取り入れ実施する。

「学年に応じた技術の統合実践の評価法の開発」

これまで本校で、学年単位で実施していた実技の評価を、学年毎に継続性を持たせ段階をふまえたものとし、技術の定着を目指す。各学年の課題を設定し、生徒が主体的に技術の習得へ向けた行動が取れるようにする。

(1) 確かな知識・技術の活動のねらい

	デジタルコンテンツを用いた e-ラーニングによる授業	専門家による特別授業	学年に応じた技術の統合 実践の評価法の開発
高校 1年	基礎看護の予習復習にナースィングスキルを活用し、基礎的な知識・技術を身につけることができる。 タブレットを利用して看護技術を振り返ることができる。		基礎看護における「看護技術コンテスト」にチームで取組む。日常生活援助技術を身につける。
高校 2年	基礎看護の予習復習にナースィングスキルを活用するとともに、臨地実習時に患者のケアに役立てることができる。 タブレットを利用して看護技術を振り返ることができる。	臨地実習のイメージが付き、不安を軽減できる。 認定看護師等の授業を通して、患者が療養生活を送る中で、医療事故の発生を回避するための知識・技術をイメージすることができる。併せて生徒自身の危険性を予測し、感染や放射線曝露から身を守ることができる。	基礎看護における「看護技術コンテスト」にチームで取組む。臨地実習で求められる基礎的な看護技術の定着を計る。
高校 3年	基礎看護の予習復習にナースィングスキルを活用する。また、臨地実習を通して、受け持ち患者の状況に応じた援助を考えることができる。 タブレットを利用して看護技術を振り返ることができる。	専門家による講座を受け、これまでの知識を関連づけ臨地（病院・災害時）をイメージするとともに、専攻科での専門家による授業への準備を進める。	基礎看護における「看護技術コンテスト」に個人で取組む。臨地実習で求められる応用的な看護技術の定着を計る。
専攻科 1年	シミュレーション教育等により、多重課題の状況に応じた患者をイメージし、課題を発見し、最善の解決方法や手技を考えることができる。		「技術の統合Ⅰ」で患者を想定した事例に合わせた実技試験を実施する。
専攻科 2年	シミュレーション教育等により、多重課題の状況に応じた患者をイメージし、課題を発見し、最善の解決方法や手技を考え、実施し評価することができる。		「技術の統合Ⅱ」で多重課題の場面を想定した実技試験を実施する。

(2) 活動の概要

a. デジタルコンテンツを用いたe-ラーニングによる授業の開発（高校1年生～専攻科2年生）

デジタルコンテンツ「ナースィングスキル」による予習を前提とした授業を展開し、自ら根拠を考えて看護技術を身につける習慣をつけさせる。ICTを授業の中に取り入れ、生徒のICT活用能力向上を図ることをねらいとし実践する。さらに、ICTを活用した協調学習や、シミュレーション教育の導入など、アクティブラーニングを取り入れるために、教員のスキルアップのための研修を行い、指導法の開発を行っていく。昨年度までの取組により、タブレット活用の効果として、即時にわからないことを調べることや動画や静止画の撮影機能を活用し、生徒たちがリアルタイムで技術を可視化することができるようになった。また、生徒自身とその生徒が所属するグループにおいて、生徒同士が情報を共有しながらグループワークに活用し、技術を見直し、よりよい方法を考え、技術の向上につなげることができている。今年度は、これらの効果をより活用した授業方法を開発し、これまでの

学習法との置き換えや、関連性について検討し、教育内容の充実を図る。

b. 専門家による特別講座（高校2年生～専攻科1年生）

病院や大学で活躍する専門家による授業を、高校2年生から学習進度や目標に合わせて導入することで、最新の知識習得や臨床のイメージをつけることを目的とする。導入にあたっては、講座の前後には校内の教員が授業の導入やまとめを行い、日ごろの授業との関連づけができるようにする。

高校2年生では、基礎看護の単元「安全を守る技術」内に、専門家による「医療現場における感染管理」と「放射線曝露からの防御」の講座を位置づけて企画し実施する。そのことにより、実際の病床の環境整備の目的や方法が明確になったり、日々行われている放射線診断に興味を持つことができると考える。その後の初めての病院実習において、病院や患者をイメージすることができ、不安の軽減にもつながる。

高校3年生では、基礎看護に「フィジカルアセスメント入門講座」、成人看護では単元「がん看護」内に2講座を実施する。フィジカルアセスメントは専攻科1年生で授業展開をしているが、臨地実習でも活用することの多い「聴診法（呼吸器）」の技術習得を目指す。また「がんと看護」では、がんの治療を受けながら生活している患者をイメージできること、放射線療法の基礎知識を習得することをねらいとし、実施する。昨年度は実施できなかったが、今年度は「基礎看護」に「災害看護」の実施を予定している。

c. 学年に応じた技術の統合実践の評価法の開発（高校3年生～専攻科2年生）

本校では、基礎看護技術の定着と実践力を身につけさせるために、各学年において技術の評価を行っている。高校1年生では「日常生活援助技術」、2年生では「臨地実習で求められる基礎的な看護技術」の定着を目指して、「看護技術コンテスト」としてチームで技術テストに取り組んでいる。高校3年生では、専攻科へ進級する前に「臨地実習で求められる応用的な看護技術」の定着を目指して統合実技演習を実施している。昨年度は、近年看護教育でも注目されている看護OSCEを取り入れ、判断力・技術力・マナーなど実際の現場で必要とされる臨床技能の習得を意識した試験になるよう取り組んだ。専攻科においても、高校1年生で実際の患者を想定した看護技術テスト、高校2年生では卒業前に「多重課題に対する看護の実践」として技術の確認を行っている。今年度は、これらの内容を充実させ、系統的な技術教育のためのプログラムとして評価方法を開発する。

（3）評価の視点

a. デジタルコンテンツを用いたe-ラーニングによる授業

（ア）定量評価

肯定的な回答をした生徒の割合

育てたい力	評価の観点	目標値（%）				
		1年目	2年目	3年目	4年目	5年目
情報活用能力	授業の予習復習にナーシングスキルを有益に活用できる。	90%	90%	100%	—	—
	看護援助技術手順書作成にナーシングスキルを有益に活用できる。	80%	90%	100%	100%	100%
	タブレットを用いて、看護援助技術映像等を視聴し、技術イメージ化できる。	—	80%	80%	80%	80%
	タブレットを用いて、自分の実技を録画し視聴することで、自分の援助技術を振り返ることができる。	—	80%	80%	80%	80%

（イ）定性評価

生徒が考えるICT活用の効果や、授業や演習における具体的な効果、生徒の学習態度の変化については、生徒の感想などから記載内容を分析し評価していく。

b. 専門家による特別授業

(ア) 定量評価

「医療現場における感染管理」「放射線の基礎知識」(高校2年生) 肯定的な回答をした生徒の割合

育てたい力	評価の観点	目標値 (%)
臨地のイメージ力	病院実習のイメージが付き、不安を軽減でき、前向きに病院実習に取り組める。	100%
知識力	病床での環境整備の必要性を理解し、実践方法をイメージできる。	100%
	生徒自身の感染管理の必要性を理解できる。	100%
	医療従事者における放射線曝露予防の必要性を理解できる。	100%

「フィジカルアセスメント(聴診法)」「災害看護」「がん看護」「放射線療法」(高校3年生)

育てたい力	評価の観点	目標値 (%)
臨地のイメージ力	がんの治療を受けながら生活している患者をイメージできる。	100%
	放射線治療の実際をイメージできる。	100%
	臨地における聴診法の実際を知り、病院実習においての実践方法をイメージできる。	100%
	災害時の看護の実際をイメージできる。	100%

(イ) 定性評価

定量評価を補足するための評価として、特別講座受講後の感想などから生徒の変容に関する記載内容の変化を分析して評価する。講義後の感想のみならず、臨地実習の後には、これらの講義による学びと臨地実習の関連性について感想を得て、臨地実習において変化が見られたかに視点をおき定性的に評価する。

c. 学年に応じた技術の統合実践の評価法の開発

これまで本校で作成し使用している看護技術の評価基準をもとにして、各学年における技術の到達目標を作成し、生徒が自ら技術の到達度を可視化し評価できるものを作成する。これらは校内のみでの達成度ではなく、臨地実習においても活用できるものとする。新たな評価方法により各学年が目指す目標値を、100%の生徒が達成することとする。

3) 科学的思考・判断力

研究的視点を取り入れた授業や学習活動を通して、看護専門職者に求められる研究能力の育成を図ることをねらいとする。

高校1年生から実験的要素を含んだ授業を展開し、学年進行とともに、データ収集、基礎的なレベルのデータ処理、文献検索やクリティークを経験させる。自分達で設定したテーマにそって、仮説を立て、その検証を試みる経験をすることで、より高度な科学的・論理的な問題解決思考を育てていく。最終的には、個々の生徒に看護研究に取組ませ、専門職者に求められる研究能力の育成を図る。意欲の高い生徒については、看護学の構築・発展に寄与し得るレベルの高い研究能力の育成を目指す。

これら一連の取組の結果、「情報を見極める力」「思考スキル」「論理的に考える力」の伸長が期待される。

(1) 科学的思考・判断力の活動のねらい

	実験的要素を含んだ学習体験	大学との連携による専門性の高い学習	看護研究方法
高校 1年	看護に関連した学びを通して、科学的根拠（エビデンス）の大切さがわかる。	「基礎看護」に関連した専門性の高い講座を受講し、専門知識を得るとともに、実験手法やデータ収集の実験を経験する。	
高校 2年	授業を通して感じた「疑問」を出発点にして、看護に関連した実験的要素を含んだ学習体験を通して、看護技術の根拠を確かめる。	「栄養」に関連した専門性の高い実験・実習講座を受講し、専門知識を得るとともに、実験手法やデータ収集の実験について理解を深める。	文献検索の方法がわかり、CiNi等を利用して、初歩的な文献検索ができる。 初歩的なデータ処理ができる。
高校 3年	高校2年生での経験を発展させ、「研究の問い」を意識したテーマを設定して、実験的要素を含んだ学習を体験する。	「薬理」に関連した専門性の高い実験・実習講座を受講し、専門知識を得るとともに、実験手法やデータ収集の実験について理解を深める。	設定したテーマにそって文献検索やクリティークを経験する。 研究計画書の作成を経験する。
専攻科 1年	文献検索を十分に行い、「食後の血糖上昇実験」を通して、得られたデータを分析することができる。		研究論文を読んで、クリティークの視点にそって考えることができる。 文献検索を行い、事例研究を進めることができる。 基本的な統計処理ができる。
専攻科 2年			研究計画書に基づいて本格的に看護研究に取組み、論文としてまとめ、発表することができる。

(2) 活動の概要

a. 実験的要素を含んだ学習体験（高校1年生～専攻科1年生）

看護を実践する上で必要不可欠な科学的根拠について、疑問や仮説にもとづいてデータをとり、科学的に考察する力を育てることを目標にしている。計器を用いて数値を測定したり、観察機器を用いて可視化したりする経験を通して、看護実践上の原則について論理的に科学的根拠を理解できるようにする。また、自ら仮説をたてて実験的要素を含んだ学習体験をし、得られたデータをもとに「考えてみる」経験を通して、科学的思考力を伸ばしたいと考えている。学年進行とともに、授業を通して感じた「疑問」を出発点にして、文献検索し、テーマを設定してデータをとり、仮説の検証を試みるなど、より高度な科学的・論理的な問題解決思考の育成につなげたい。SPHにおける各取組を有機的に繋げてゆくために、テーマ設定や手法を検討しながら進めてゆく。

SPH指定後、高校2年生で看護技術の根拠を確かめるための学習体験を、プロジェクト学習の手法を用いて実施してきた。その取組みの成果物として「私たちが見つけたエビデンスに基づいた看護技術の提案集を作る」ことを目標として行ってきたが、生徒の「疑問」を出発点にするため、年ごとに実施内容が異なってくる。提案集のテーマについては、毎年新たに設定することにして、生徒に決定させる。

b. 大学との連携による専門性の高い学習（高校1年生～高校3年生）

「看護」に関連した授業の一環として、大学と連携し、大学の施設・設備・実験機器を使用して、大学の指導者による専門性の高い実験・実習講座を受講する機会を作る。高校1年生では「基礎看護」に関連した内容、高校2年生は「栄養」に関連した内容、高校3年生は「薬理」に関連した内容で実施する。また、一部の生徒を対象に、授業外で「細菌培養実験講座」や「血圧変動実験講座」を実施していく。

c. 看護研究方法の学習（高校2年生～専攻科2年生）

高校2年生「看護情報活用」の授業の中で、文献検索の基礎、データ処理の基礎、統計処理の基礎

やプレゼンテーションの手法等を学習内容に取り入れ実施する。高校3年生では、「成人看護」の授業の一環として、家族の基礎血圧や家庭の味噌汁の塩分濃度を測定してデータ化し、体格（肥満度）、運動習慣・飲酒習慣・喫煙習慣等との関連性を、Excelで処理し、分析する演習を行う。また、「基礎看護」の授業の中に『SPH看護研究講座』を設定して、各自のテーマにそって文献検索やクリティークを経験させ、さらに「看護研究計画書」の作成も経験させる。

専攻科進級後は、これまでも実施してきた研究手法に関する指導を、より本格的な指導内容に再構築する。研究論文に触れる経験を多くし、学年進行とともにクリティークする力の向上を図る。最終学年で課す「看護研究」に向けて、実証研究に取り組む一部の生徒については、研究目的や研究プロセスの妥当性などを多角的に考え、学術的価値について正しく評価できるレベルのクリティーク力を目指す。また、専攻科1年生で履修する「統計学」の授業目標を、統計学的視点や数値の持つ意味を理解したうえで研究論文を読むことができるレベルに設定し、外部講師の協力を得る。27年度は実現しなかったが、大学の指導者による『看護研究方法』に関する講座を、引き続き企画し実現を図る。

27年度、意欲の高い高校3年生を中心に結成した「看護研究ゼミナール」の一部の生徒については、最終学年までに、統計的手法を用いて検定処理ができるレベルを目標に研究指導を計画する。また、「看護研究ゼミナール」を、学年縦断のサークル活動として定着させる。

(3) 評価の視点

(ア) 定量評価

・生徒の自己評価

育てたい力	評価の観点	目標値
情報を見極める力	その情報が真実かどうか考え、判断する力	1年間で身についた力を「とてもついた」「ある程度ついた」と回答した生徒の割合が80%以上となることを目標とする。
思考スキル	解決するためにむだなものを捨て、重要な事実をもとに考えを組み立てる力	
論理的に考える力	自分の頭と自分の意志で筋道を立てて考える力	

※今年度は、生徒が自らの成長を認識し、自己評価できる評価基準を検討する。評価の時期についても合わせて検討していく。

・教員による客観的評価（科学的思考・判断力の活動を通して育てたい力）

育てたい力	評価の観点	評価材料	目標値 (%)				
			1年	2年	3年	4年	5年
科学的視点	授業（実験的体験・専門性の高い講座の受講）を通して看護実践におけるエビデンスの大切さがわかる。	自己評価表	80%	100%			
文献検索する力	初歩的な文献検索ができる（CiNiiを使って複数の文献検索ができる）。	課題提出物		80%	100%		
	先行研究から、研究目的を明確にすることができる。					30%	50%
先行研究から、研究仮説を明確にすることができる。						10%	30%
データ処理する力	初歩的なデータ処理の方法を知る（平均値・標準偏差・相関係数）	PC作業状況		80%	100%		
	データの種類に応じてグラフや表の形で可視化することができる（Excelを使って散布図を描く、ヒストグラムを描く）。	レポート		80%	100%		

	統計的手法を用いてデータ処理できる（平均値・標準偏差・相関係数を求める）。					30%	50%	
	統計的手法を用いて検定処理ができる。（※看研ゼミ生の目標）					3%	5%	
クリティークする力	研究論文を読んで、評価の視点にそって考えることができる。	クリティーク場面				30%	50%	100%
	研究論文を読んで、評価の視点にそって批判的に考え、研究プロセスの妥当性や価値についてある程度評価できる。					10%	30%	50%
	研究論文の内容を理解し、研究目的や研究プロセスの妥当性などを多角的に考え、学術的価値について正しく評価できる。 （※実証研究に取り組む一部の生徒）	レポート						3%

4) 生涯学び続ける力

本校のSPHの目的として、生涯にわたって看護の専門性を追求し続ける力を持った看護専門職者を育てるために「生涯学び続ける力」を育成することを目指している。本校の研究の仮説として「生涯学び続ける力」は各々の生徒が持つ「豊かな人間性」「確かな知識・技術」「科学的思考・判断力」を統合する力と捉えている。そして、「生涯学び続ける力」は、生徒が自らの力で課題を発見し、戦略的に課題を解決し、他者に提案する過程の中でコンピテンシーを高めると同時に可視化した学びの軌跡から自らの成長に気づきそれを原動力として課題を解決する力を身につけることにより育成するものと考えている。本校では、「生涯学び続ける力」を育成するために「プロジェクト学習」を取入れている。

「イメージする力」「課題発見力」「課題解決力」「コミュニケーション力」「プレゼンテーション力」の5つの力を育てることが、専門職者として「生涯学び続ける力」を持つ生徒を育てることにつながると思っている。取組を実践する過程において、先のことを具体的に「イメージする力」は、起こりうる事象を予測できる力を付ける。物事を見て、そこにある課題を見出し、戦略的に課題を解決し、他者に提案する「プロジェクト学習」では、「コミュニケーション力」「プレゼンテーション力」として、自分の考えや気持ちを他者と交換する力や相手を納得させるような伝える力を身につけることを目指している。また、ポートフォリオを活用し、可視化した学びの軌跡から自らの成長に気づき、自己を肯定し、さらなる取組のステージに進もうとする原動力となることをねらいとしている。変化し続ける社会の中で、将来いかなる状況においても、自ら課題を発見し、その解決方法を導き出し、それを他者に伝える力は専門職者として必要な力と考える。その手法であるプロジェクト学習によって身につく思考プロセスを獲得する事をねらいとする。

高校1年生で「プロジェクト学習」の手法を用いた課題解決の方法を身につけるため、第1段階はチームで取り組む。「防災」をテーマにチームメンバーの多角的な視点で課題を発見、その課題を解決する過程において、数値・根拠を常に求めるコーチングやポートフォリオを活用し発見や情報を可視化することで、今まで気づかなかったものに気づくことを目指す。第2段階として、この思考過程を個人でも実施し、プロジェクト学習の手法で他者の「健康のための生活改善」を提案する。高校2年生以降、「豊かな人間性」「確かな知識・技術」「科学的思考・判断力」を相互に関連づけ、自ら課

題を発見し、課題解決するために「プロジェクト学習」を活用し、生涯学び続ける力を育てることを目指している。

(1) 生涯学び続ける力の活動のねらい

	ポートフォリオの活用	プロジェクト学習	
高校 1年	パーソナルポートフォリオを作成し、自分が力を入れて取り組んだことを可視化することで、自己肯定感を向上する。	プロジェクト学習の手法を身につける。 「コミュニケーション力」、「プレゼンテーション力」を身につける。 常盤高校生に役立つ防災マニュアルを提案します！ 大切な人の健康を守る方法を提案します！	取組を実践することにより、「イメージする力」「課題発見力」「課題解決力」「コミュニケーション力」「プレゼンテーション力」の5つの力を前年度よりも向上させる。
高校 2年		疑問に思ったことを明らかにするために、自ら課題を発見し、先を想像し、具体的に予測を立てることで課題を解決しようとする力を身につける。 エビデンスに基づいた看護技術を提案します！	
高校 3年	発見した課題に対し、適切な解決方法を提案する力を身につける。 臨地実習に関するプロジェクト		
専攻科 1年	パーソナルポートフォリオをキャリアポートフォリオにして継続させ、看護、医療に関する新聞・雑誌などの記事や書籍のリスト等を資料化し、自分が目指す看護像について意識啓発を図る。	看護の専門職者を目指すものとして、自ら発見した課題に対し、適切な解決方法を提案する力を身につける。 成人期の疾病予防、健康増進に向けたアイデアを提案します！	
専攻科 2年		看護の専門職者を目指すものとして、自ら発見した課題に対し、適切な解決方法を提案する力を身につける。 倫理に関するプロジェクト	

(2) 活動の概要

a. ポートフォリオの活用（高校1年生～専攻科2年生）

高校1年生には、入学前の説明会でこれまでの自分の成長を振り返り、自分の努力したことを可視化するツールとしてパーソナルポートフォリオを紹介し、入学までに実際に作成する。高校2年・3年生においても、前年度の自分の成長と感じたことや努力したことを加えたパーソナルポートフォリオをクラス替え後の自己紹介ツールとして活用していく。高校3年生はそのパーソナルポートフォリオを活用し、自分の過去・現在から未来を考える「夢をかなえようプロジェクト」を行い、将来の目標を見通し、専攻科進級時や、卒業時、卒業後5年までに、その目標を達成するためにどのような力を身につけている必要があるのかをリサーチし、将来像の目標を明確にする。そして、それらをキャリアポートフォリオとして発展させ、就職後を見すえた活用をしていく。

b. プロジェクト学習（高校1年生～専攻科2年生）

高校1年生が4月に、鈴木敏恵先生より「プロジェクト学習」に関するオリエンテーションを受け、4月～7月にチームプロジェクトとして、「常盤高校生に役立つ防災マニュアルを提案します！」を行い、プロジェクト学習の手法を身につける。7月～翌年2月にかけて、本校教員が主となり、鈴木先生のアドバイスを受けながら、マイプロジェクトとして「大切な人の健康を守る方法を提案します！」を実施する。マイプロジェクトのプレゼンテーションは、高校2年生とも交流し、地域、病院関係、保護者に公開していく。高校2年生は、授業で学んだことで疑問に思ったことを実験で確かめ、「エビデンスに基づいた看護技術を提案するプロジェクト」をプロジェクト学習の手法を用いてまとめる。専攻科1年生では、初の試みとして「成人期の疾病予防、健康増進に向けたアイデアを提案し

ます」プロジェクトを行い、「成人期の疾病予防、健康増進に向けたアイデア集」を作る取組を行う。
 授業だけでなく校内の活動においても、高校1年生で身につけた「プロジェクト学習」の手法を用いて様々な活動を行っていく。校内の教員でも研修や情報共有を行い、授業や学校活動の中でプロジェクト学習を行うことを目指す。

(3) 評価の視点

a. ポートフォリオの活用

当該活動は、生徒の自己肯定感や看護師としてのキャリア意識の涵養を図るというねらいがあり、ポートフォリオの中身について評価の対象としないことが適当と判断した。

b. プロジェクト学習

(ア) 定量評価

育てたい力	評価の観点	目標値
イメージする力	先を想像し、具体的に予測することができる。	1年間で身についた力を「とてもついた」「ある程度ついた」と回答した生徒の割合が80%以上となることを目標とする。
課題発見力	状況を判断し、課題を見いだすことができる。	
課題解決力	最善の方法を見だし解決することができる。	
コミュニケーション力	他者と意見を交換し、共有することができる。	
プレゼンテーション力	伝えたいことを表現し相手を納得させることができる。	

(イ) 定性評価

生徒は「成長エントリー」として、学年末に自分が1年間で成長したことや、具体的な行動変容を書き出しながら振り返りを行う。定量評価を補足するための評価として、「成長エントリー」や感想などから、具体的にどのような力がついたと感じているのかについて生徒の変容に関する記載内容の変化を分析して評価する。

5) 教員研修

(1) 「プロジェクト学習」校内研修

鈴木敏恵先生による教員研修を実施する。プロジェクト学習を進める上での具体的な指導を受け、校内で教員が行っているプロジェクト学習は、本校の教員が実施できるようにスキルアップを図る。

(2) アクティブラーニングのスキルアップ

本校では、プロジェクト学習のみならず、協調学習やシミュレーション教育などのアクティブラーニングを授業実践の中に取り入れるために協調学習や、シミュレーション教育の研修会に積極的に参加する。そして、研修会に参加した教員が授業を行い、他の教員へ伝達することにより教員間で教育方法に関する意見交換を行う等、全体のスキルアップを図る。

5. 実施体制

(1) 研究担当者

氏名	職名(担当教科)	役割分担
大川 尚子	主幹教諭(看護)	豊かな人間性
高木 邦子	主幹教諭(看護)	科学的思考・判断力
飯村 洋子	教諭(国語)	豊かな人間性
田尻 茂樹	教諭(地歴公民)	豊かな人間性

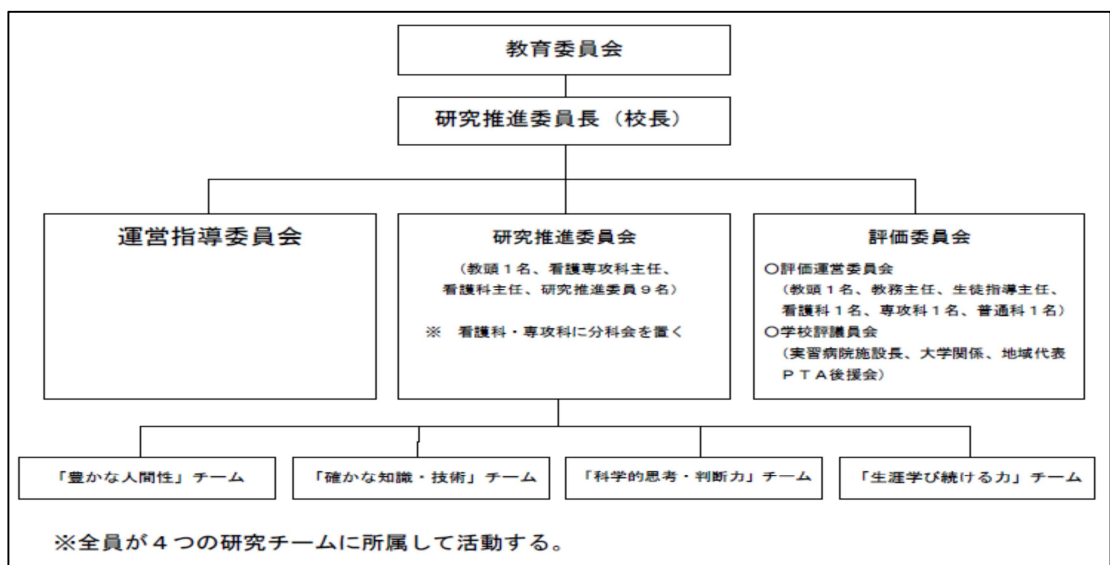
三角 定	教諭（数学）	豊かな人間性
高橋 幸雄	教諭（数学）	豊かな人間性
守屋 典子	教諭（理科）	科学的思考・判断力
清水 宏一	教諭（保健体育）	豊かな人間性
庄子 学	教諭（英語）	生涯学び続ける力
織田 千香子	教諭（看護）	生涯学び続ける力
川口 有理	教諭（看護）	科学的思考・判断力
黒川 章子	教諭（看護）	確かな知識・技術
三津橋 佳子	教諭（看護）	確かな知識・技術
守屋 有紀	教諭（看護）	豊かな人間性
大貫 由美子	教諭（看護）	生涯学び続ける力
森 英美	講師（看護）	確かな知識・技術
川田 礼子	教諭（看護）	確かな知識・技術
大塚 真弓	教諭（看護）	科学的思考・判断力
松尾 直美	教諭（看護）	生涯学び続ける力
井口 多恵子	教諭（看護）	科学的思考・判断力
丸山 祐子	助教諭（看護）	生涯学び続ける力
武部 沙也佳	助教諭（看護）	確かな知識・技術
榎本 聖子	教諭（看護）	科学的思考・判断力
柴田 江美子	教諭（看護）	豊かな人間性
伊藤 玲子	教諭（看護）	生涯学び続ける力
伊藤 栄子	教諭（看護）	科学的思考・判断力
村田 ひろみ	教諭（看護）	豊かな人間性
安藤 志津子	教諭（看護）	科学的思考・判断力
牛坂 留都	教諭（看護）	科学的思考・判断力
小平 栄子	教諭（看護）	豊かな人間性
井筒 路子	教諭（看護）	生涯学び続ける力
古場 真理子	教諭（看護）	豊かな人間性
横山 研介	教諭（看護）	確かな知識・技術
中澤 瑞果	教諭（看護）	確かな知識・技術
立林 春彦	助教諭（看護）	科学的思考・判断力
山下 実江	助教諭（看護）	生涯学び続ける力
工藤 千恵子	助教諭（看護）	生涯学び続ける力
垣花 結花	助教諭（看護）	豊かな人間性
山本 望	助教諭（看護）	生涯学び続ける力
吉田 佳苗	助教諭（看護）	確かな知識・技術
柴田 優子	養護教諭	豊かな人間性
山口 修平	実習教員（理科）	科学的思考・判断力

堤 映子	主任実習教員	確かな知識・技術
新井 久枝	主任実習教員	科学的思考・判断力
穴戸 由子	主任司書	豊かな人間性

(2) 研究推進委員会

氏名	職名(教科)	役割、分掌等
守屋 有紀	教諭(看護)	研究推進委員事務局長、看護科副主任
三津橋 佳子	教諭(看護)	「確かな知識・技術」研究班チーフ、研究推進委員副事務局長、看護科主任
榎本 聖子	教諭(看護)	「科学的思考・判断力」研究班チーフ、看護科3学年主任
織田 千香子	教諭(看護)	「生涯学び続ける力」研究班チーフ、看護科1学年主任
大川 尚子	主幹教諭(看護)	「豊かな人間性」研究班チーフ、「記録・広報」チーフ
柴田 江美子	教諭(看護)	専攻科主任
清水 宏一	教諭(保健体育)	看護科2年学年主任
高木 邦子	教諭(看護)	看護科主任
大貫 由美子	教諭(看護)	看護科担当
古場 真理子	教諭(看護)	専攻科担当
中澤 瑞果	教諭(看護)	記録・広報

(3) 校内における体制図



6. 研究内容別実施時期

研究内容		実施時期												
		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
豊かな人間性	高1	花を育てる・倫理に関する活動(通年)												
		花を植える		地域との連携 地域活動体験					花を植える					
	高2	ゴーヤを育てる・倫理に関する活動(通年)												
				地域との連携 地域活動体験										
	高3	地域・外部機関との連携		大学との連携 被災地ボランティアスタディツアー(釜石市)								地域との連携		
			地域との連携 地域活動体験											
専1	被災地ボランティアスタディツアー(釜石市)		生命倫理に関する コラボ授業					ボランティア活動報告(産業教育フェア)			活動報告(地域)	大学との連携	生命倫理に関する講義(講義)	
専2			生命倫理に関する プロジェクト学習											
確かな知識・技術	高1	e-ラーニング活用授業・協調・シミュレーション										技術の統合実践 技術コンテスト		
	高2	病院との連携	e-ラーニング活用授業・協調・シミュレーション										技術の統合実践 技術コンテスト	
			病院との連携(感染・管理)	病院との連携(放射線)										
	高3		病院との連携(フィジカルアセスメント)	e-ラーニング活用授業・協調学習・シミュレーション										技術の統合実践 技術テスト
	専1		e-ラーニング活用授業							技術の統合実践		協調・シミュレーション		
	専2		e-ラーニング活用授業・協調・シミュレーション										技術の統合実践 技術テスト	
科学的思考・判断力	高1	看護技術に関する実験的学習体験												
					大学との連携(実験・講義)									
	高2	プロジェクト学習の手法を用いた研究的学習活動												
		(文献検索)	実験的経験	データ分析	大学との連携(実験・講義)	大学との連携(実験・講義)	大学との連携(実験・講義)							
	高3	研究的学習活動												
				大学との連携(実験・講義)										
専1				大学との連携(サイエンスカフェ)	統計学講義・看護研究講義・ケースレポート						大学との連携	看護研究		
専2	看護研究													
生涯学び続ける力	高1	プロジェクト学習												
		ポートフォリオの活用・プロジェクト学習あり	チームプロジェクト学習「ときわ防災マニュアルを作る！」	マイプロジェクト学習「大切な人の健康を守る提案をします！」							公開プレゼンテーション(地域・病院・保護者)			
	高2	プロジェクト学習												
		ポートフォリオの活用・プロジェクト学習あり	チームプロジェクト学習「私たちが見つけたエビデンスに基づいた看護技術を提案します！」											
	高3	プロジェクト学習												
		マイプロジェクト学習「臨地実習に関するプロジェクト」												
専1	プロジェクト学習													
	チームプロジェクト「成人期の疾病予防・健康増進に向けたアイデアを提案します！」													
専2	プロジェクト学習													
	倫理に関すること													

※ 実施時期は、事業計画書提出時のものであり、実際の事業着手は契約締結後とする。

7. この事業に関連して補助金等を受けた実績

補助金等の名称	交付者	交付額	交付年度	業務項目

8. 知的財産権の帰属

※ いずれかに○を付すこと。なお、1. を選択する場合、契約締結時に所定様式の提出が必要となるので留意のこと。

() 1. 知的財産権は受託者に帰属することを希望する。

(○) 2. 知的財産権は全て文部科学省に譲渡する。

9. 再委託に関する事項

再委託業務の有無 有・無

※有の場合、別紙3に詳細を記載のこと。

II 委託事業経費

別紙1に記載

III 事業連絡窓口等

別紙2に記載